

## 外国人のみた日本 情報社会、それは集団と協力の文化? (カルチャー・ショック)

著者	Razafimahefa Ivohasina Fizara, 梶山 貴史[訳]
権利	Copyrights 日本貿易振興機構(ジェトロ)アジア経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) <a href="http://www.ide.go.jp">http://www.ide.go.jp</a>
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	125
ページ	39-39
発行年	2006-02
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2344/00005543">http://hdl.handle.net/2344/00005543</a>

# カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Razafimahafa Ivohasina Fizara  
出身地：マダガスカル・アンタナナリボ  
所属：タンホンバト県・県庁エコノミックアドバイザー  
日本滞在：2005年5月～8月

## 情報社会、それは集団と協力の文化？

ラザファイマヘファ・イヴォハシナ・フィザラ

本誌二〇〇四年一月号のこのコーナーで、私は（日本のような）先進国と（マダガスカルのような）開発途上国との生活水準の「真の」格差を述べたが、今回のカルチャー・ショックは母国に対するネガティブな面の紹介はさし控え、ポジティブな観点から執筆してみたい。そのショックは、私が熱心に貧困問題に取り組んだり、母国の発展に貢献するきっかけとなった。先ず私は、生活していた日本社会を分析し、次にマダガスカルの発展に役立つことを見つけてこにした。

日本社会に対する一番目の印象は、「情報社会」ということだ。誰もが情報―特に若者は「現在や未来」の情報、年配者や高齢者は「過去」の情報―を渴望している。日本の若者は、「情報技術」により常に時代の最先端にとどまろうと必死になっているが、年配者や高齢者の多くは、日本や世界の歴史に関する情報を欲している。彼らはまた、書物、集会、旅行などを通して様々な国々の歴史を知りたがっているようだ。日常生活では、マダガスカルという国が日本人にはあまり馴染みのない国であるかのように感じられたため、マダガスカルを日本社会に紹介したい私の気持ちと、日本人がより多くの情報を望んでいることとは

うまく合致するのではないかと思う。そのため私はミーティングを主催し、様々な年齢層の方々に現在のマダガスカルを紹介した。特に経験豊かな年配者の方々に母国のことを紹介できたが、彼らと共通の話題について定期的に情報交換も行え、その集まりは有意義に感じられた。

日本社会に対する二番目の印象は、「集団の文化」である。その傾向は最近ではやや弱まりつつあるものの、日本人は何よりも集団に属することに重点を置く。外からみれば、その集団は家族よりも重みを感じられる。日本人は集団で行動することが多く、その集団内で各々の意見が熟考された後に決定が下される。だから集団内では、単独で決断しようとするれば、「部外者」的な行為と見なされてしまう。集団で決定されたことはスムーズに物事が進む一方、個人主義的な行為は失敗に終わることがあるのだ。この二つの印象を心にとめつつ、日本とマダガスカルの関係を結びつけ、私は母国を発展させる方法を探った。神戸での滞在中、私は母国マダガスカルを紹介しようと試みた。経済発展においては、両国間にはかなりの格差があることを説明し、周囲の人々の関心も引こうとした。その後、親しい知人たちと話し合い、両国が協力できる

ような組織づくりを目指した。更に、母国をぜひ知ってもらいたい気持ちを、私が彼らに伝えたことで、一二人もが二〇〇五年四月にマダガスカルへと旅立った。母国の潜在能力や協力可能な分野を調査したことにより、以下のことが実施されるに至った。

- ①タンホンバト県の地元の小学校に財政支援が行われた。
- ②日本から同県の消防署に消防車が送られた。
- ③同県の住民に衣類や学校で使用される教材が送られた。

右記の活動を通して、私が感動したカルチャー・ショックは具体的には次の通りだ。

- ①協力の文化。マダガスカルという国を知ってもらうために、また両国の協力関係を迅速に築くために、私に会ってくれた人々が積極的に、また熱心に応じてくれた。
- ②力強さ。私には時に到底及ばないペースで物事を進められる、その組織のメンバーに力強さを感じた。
- ③情熱。誰もが自分の仕事に専心した。
- ④イニシアティブ。迅速に、何事にも屈せずに物事に取り組むことができた。

このショックはまた、宮沢賢治が小説の一節で願った、人生に対する教訓でもある。

（前海外客員研究員／訳 榎山貴史）